

天理教の朝鮮伝道

大谷 渡

はじめに

現在、大韓民国における天理教信徒数は二〇万から三〇万といわれ、特に京畿道・慶尚南道・全羅南道に多くの教会が分布している。これらの教会はソウルに大韓天理教本部を設置し、「みかぐら歌」の翻訳や修養科の設立など、日本の天理教本部を離れて独自に活動している。それは政治的理由もさることながら、むしろ天理教が朝鮮人の間に完全に根をおろしつつあることを示している。

天理教の朝鮮伝道は日清戦争後まもなく開始され、日本の朝鮮支配の進行と相まって本格化した。今日における信仰の基盤はその統治期間中に確立されたものである。しかし、このような植民地支配下における国内宗教の伝道は単に天理教のみではなかった。一九一〇年(明治四三)『朝鮮總督府統計年報』によれば、すでに真宗本派をはじめとする仏教各派・金光教・神理教およびキリスト教各派もまた伝道を始めていたことがうかがえる。そして、これらの各教宗派は大正年間に入ると総督府の「成べく日本人の足蹟未だ繁からぬ鮮人部落に腰をすえて貰ひたい」^①という要望にこたえて、朝鮮人伝道に取り組んだのであった。そこには近代日朝史における一つの縮図がある。しかるに、今までこの方面から日朝史を眺めた研究は見当らない。

したがって、本稿では朝鮮人伝道に成功した天理教を取り上げ、伝道基盤の確立過程を見てみたいと考える。そこ

には幕末の大和の片隅に誕生した天理教が、いかに伝道を進め朝鮮人に受容されたのか等、きわめて興味深い問題が呈示されているといえよう。それにあたっては、一八九一年(明治二四)に発刊され今日多くの天理教関係雑誌の中でも中心的位置を占める『道の友』の記事や、新しい史料を紹介しつつ叙述してゆきたいと思う。

一、伝道の開始

天理教は、教祖中山みきが一八八七年(明治二〇)に没して以後の一〇年間に急激な膨張をとげた。その結果、一八九〇年代半ばになると呪術的布教方法と熱狂的信仰がわざわいして、社会的に激しく批判されることとなった。新聞では「余り凝り固る為か教会員中六人ほど俄に発狂」(『都新聞』一八九四年一月九日)とか「迷執世界天理教会」(『一六新報』一八九四年四月一日)などと頻繁に報道されるありさまであった。また、一八九六年(明治二九)には内務省から「其ノ弊害漸次蔓延ノ傾向有之、之レヲ今日制庄スルハ最モ必要ノ事ニ候」と、弾圧令が出されている^②。その中であつて、『道の友』六九号(一八九七年八月)は「台湾布教」を報じ、伝道線をさらに広める勢いを示した。朝鮮伝道はこのような初期における膨張の波の一つと考えることができる。そして、その具体的状況については、ここに最も早いと思われる伝道例二つを紹介することができる。

岡山県児島郡比日村(現在、玉野市)の漁師南浜喜平は二〇歳の時に入信し、一八九四年(明治二七)には同村に吉備出張所を設立した。喜平はその後も熱心に伝道し、一八九六年には聳天村・八浜村・北浦村(現在、玉野市)に教会を設けるため岡山県庁に出願することとなった。ところが、当時天理教に対する社会的攻撃がいよいよ激化していたので、いずれも却下されてしまった。このため多くの信者が動搖をきたし、信仰から脱落するものが続出した。そのとき喜平の受けた衝撃はただならぬもので、岡山県下での布教をいっさいあきらめるほどであったという。ちょうどそのころ釜山から帰国した向井政市の入信をきっかけに、喜平は朝鮮へ渡ることを決意したのであった。このとき、喜平は伝道のゆきづまりを悪因縁と悟り、その悪因縁抹消を朝鮮伝道に賭けたのだと伝えられている^③。

喜平が釜山で布教を始めたころ、京城では香川県出身の大工大熊松次郎が伝道を開始していた。松次郎は朝鮮に渡る以前より熱心な信者で、仕事を忘れて布教に歩く状態であった。これを憂えていた松次郎の妻の弟は京城で商売成功の後、義兄の天理教熱を冷却させる目的で姉夫婦を京城に呼んだのである。朝鮮に渡って以後も松次郎は信仰を捨てはしなかったが、専業の大工職に励みつつ同僚の大工・左官等に布教することとなったという。^④

これらの例は、国内における天理教攻撃が伝道者に心理的圧迫を加えて国外に出る要因となったことや、日本人の朝鮮進出と天理教邪教観が偶然的契機をなして伝道が開始されたことを示している。いずれにしても、そこには当時天理教がおかれていた社会的状況が色濃く反映しているといわねばなるまい。

二、伝道熱の高揚

(一) 統監府令と教会本部の伝道対策 一九〇五年(明治三八)十一月、第二次日韓協約が調印され、朝鮮は名実ともに日本の保護国となった。これにともない、日本宗教の朝鮮布教についても「此等ノ弊害ヲ匡正シ教化ノ目的ヲ達セシメンカ為」^⑤の規則が公布されることとなった。この規則は「韓国ニ於ケル管理者」の選定義務や教会所設立認可の必要性等を規定したもので、統監府が布教管理者を通じて国内宗教の布教を統制しようとしたものにほかならなかった^⑥のである。これにもとづき、一九〇八年(明治四一)に天理教は仏教各派・キリスト教(米国「メソヂスト」派・日本組合教会)・金光教と並んで布教管理者の認可を受けた^⑦。そこで、教会本部は朝鮮の教勢視察のため、翌年四月に松村吉太郎一行を派遣することとなった。この時の状況を松村は次のように回想している。

上級教会の巡教もない、もちろん布教費の応援もない。ただ各人が報恩の念に燃えて困難な道を歩んでいた。統監府や警察について、在韓布教者についての意見を聞いてみると、果して評判は悪かった^⑧。

本国の教会から遠く隔たり、伝道に成功せず窮乏した布教者たちの群れが、朝鮮での天理教の悪評判ともなっていたのである。ここに至って、教会本部は統監府や警察の印象改善を目的とした伝道対策を進め始めた。すなわち、一

九〇八年釜山に布教者の合宿所が設けられ、その翌年元歩兵少佐佐藤松人を布教管理者代理とした。また、一九〇九年二月には朝鮮布教規定が内定されたのである。

合宿所の設立は、「韓国に於ける各教会布教者統一と便利を謀り、(中略)布教者を管理すると共に、又保護をも与ふる」^⑩目的を持ったもので、単に布教者に宿舎を提供するだけでなく、その支配と訓練を意図したものであった。また、朝鮮布教規程には「身体健全品行方正ナル者」、「渡航滞在中ノ費用ヲ支弁シ得ル者」等々の規定がなされていた。^⑪かくて、教会本部の朝鮮伝道に関する支配が確立されていった。

(二)伝道理論の構築 教会本部が朝鮮伝道に乗り出すことによって、伝道推進のための理論的裏づけが唱えられるようになった。一九〇六年一月、『道の友』は「天理教会の使命」と題して次のように述べている。

教祖は常に弟子等に向ひ「世界一列」といふことをお教へになりました。天理教の伝道区域は、日本国内に限りません、台湾の新領土・朝鮮・満州・支那・印度・欧米各国世界の隅々・世界の端々まで吾が天理教の教理が普及するまでは、此の大事業は常に教会の上に係っているであります。^⑫

これは「月日にハせかいちううハみなわが子たすけたいとの心ばかりで」と、人間はすべて唯一絶対神天理王命の子と主張した教祖中山みきの言葉にそって海外伝道を奨励したものである。しかし、やがてこの教義面での伝道理論は、国家の隣邦進出政策の上に接木した形で主張されるようになっていった。

此世を極楽と成し世界の甘露台を築くのは神の聖意であって夫が即ち日本国の使命日本人の天職である。彼の日清の役日露の戦争は其の第一着手であって、今日成しつつある所の満州の経営韓国の保護、即ち満韓の開拓の如きは其の第二着手である。^⑬

そして、ついには日韓の結合は「信仰に由って精神的に打って一丸と為すことである」と主張する論が出るに至るのである。^⑭このように伝道推進の理論的背景は、世界一列同胞救済を掲げつつその役割を当時の国策と癒着したところに見出そうとするものであった。

一方また、伝道推進の理論とともに伝道方法に関する助言も盛んに論じられた。「踊る宗教があるので専ら『御神楽』で布教せよ」、「迷信深さを利用して一挙に布教するといよい」等々と、アドバイスの例は枚挙にいとまがない。これらは一九〇七年前後の天理教内で、いかに朝鮮伝道に対する熱が高まっていたかを示している。そして一九一〇年（明治四三）の日韓併合は、こうした伝道に対する熱気をさらに高めることとなったのである。

政治も教育も宗教も同じ源より出たる一つ流でなければ、全くの同化は出来ないと申すのであります。私は此点からして我が天理教でなければ政治教育と提携して、たすけたてあふて新国の精神的併合、新国民の内部的同化を全うする事は出来ないと主張するのであります。^⑩

かくて、天理教団は「新国民の内部的同化」を自らの任と標榜し、猪突することとなった。時あたかもロンドン布教、台湾布教、清国布教と、海外への伝道熱は最高潮を示していた。そのなかにあつて、教団は「吾が教師は内地の小天地に踞踏する事なく、新日本人を教化するがために寧ろ朝鮮に行くを可とすべきにあらずや」と、朝鮮への伝道を煽りに煽つたのであつた。

(三)伝道の活発化 朝鮮に行くべしという教内の風潮の中で、朝鮮伝道を行なつた例を沢村芳郎の木浦布教を中心にみてみよう。

岐阜県武儀郡下牧村蔵生字狭野（現在、美濃市）の沢村芳郎は幼少のころから信心深く、御岳講の熱心な信者であつた。芳郎が足の怪我から天理教に入信したのは一八九三年のことであつた。その後、長女の死、自身の大患、家業の不振など度重なる苦難の中で名古屋布教を決意したと言われ、朝鮮伝道以前すでに布教生活に入っていたことが窺われる。

芳郎は生来病弱で幾度か大患に襲われたが、肺結核となつた一九〇七年当時は、先祖伝来の田畑もすっかり無くしてしまい、どん底の状態であつたという。胸の病は以前岐阜で開業していた医者に見てもらつと、肺も肋膜炎もすっかり犯されており手の施しようがないと死の宣告を受ける程であつた。あといくばくもない命と言われた芳郎は教会本

部の海外伝道の奨励を思いつき、最後の勇気を振り絞って朝鮮伝道を決意したという。その時芳郎は、残る命を異国の兄弟に教えを広めるために使い、神に喜んでもらおうと考えたのだと伝えられている。こうして一九〇八年（明治四一）二月、芳郎は親戚の井上兼五郎とともに神戸港から木浦に向って出発した。木浦に上陸して以後芳郎の病は回復に向い、ふたりは知り合った日本人に教義を漢文になおしてもらおうなどして伝道を行なったという。そして、三カ月後には百数十戸の信徒を得る程の成果をあげたと伝えられている。芳郎の病気はもともと誤診であったか否か今ははかるべくもないが、とまれ大きな宗教的体験であったことは否定できない。かくてその年一〇月、芳郎と兼五郎は三名の朝鮮人留学生をつれて帰国したのであった。^⑩

この他、大阪戎町の山本定次郎は父の死と家業であった材木問屋の倒産という逆境の中で、入信と朝鮮伝道を決意したという。定次郎は一九〇九年に朝鮮に渡り、多くの朝鮮人赤痢患者に伝道した。そして翌年帰国する時には村人が木浦港まで送りに来て、定次郎の袖を引っ張って皆泣いたと伝えられている。^⑪

このように、どちらも当時の伝道熱の高揚と無関係ではないが、その直接的動機となったものは伝道者個々の信仰に深く根ざしたものであったことを示しているといえよう。

四 朝鮮人の入信 『道の友』二二六号（一九二〇年一〇月）は前記の沢村芳郎が留学させた三名の朝鮮人のひとり張喜承について、「朝鮮人の社会ではなかなか巾の利く両班に属する人で、郡主や宮内府主事を勤めた事もある」と報じている。両班は文武両官に任ぜられる家柄で、貴紳階級である。他の二名の青年についてもかなり教育を受けたものであることを述べている。また、教勢視察に行った松村吉太郎は、釜山宣教所には「門地も高く学識に富んだ斐琪璉以下七〇名の朝鮮人信者がいると語っている。^⑫」この他、一九一二年三月の『道の友』には前朝鮮文部大臣金斗菴が教会本部に使者を送り、神前に「大蠟燭及白紙、絹等の捧物に願文を添へて」奉献したという記事が写真入りで載せられている。これとちょうど同じころ、奈良県の敷島大教会には、全羅北道群山府出身の趙南斗という元漢文学校教師が来ていたという。^⑬ 趙南斗は天理教の「現世人間靈教一条」の教理に感じて入信したと告白しており、また金斗菴

の場合はその使者の『来意及感想文』のなかで次のように述べている。

宗教モ亦天時ニ随フ、新宗教ノ出生ヲ以テ世界ヲ改良スル也、(中略)我教祖大日本帝国ニ生ジ天命ヲ受ケ修徳作
成シテ吾ガ天理教門ヲ特立ス、神様造化ノ守護ナリ、上ヲ奉リテ以テ萬邦ヲ化ス、

しかし、趙南斗の告白、金斗菴使者の『来意及感想文』いずれも不完全な漢文で書かれており、これをもって彼らの入信動機、天理教観とするには頗る疑わしい。金斗菴は布教管理者代理佐藤松人の関係から入信したと言われており、むしろ佐藤松人との個人的関係の強いものであったかもしれない。おそらく、『来意及感想文』は天理教内の人間が書いたものであろうと思われる。いずれにしても、この期の朝鮮人信徒数は『朝鮮総督府統計年報』によると、一九一一年一二月末現在、三、四四七となっており微々たるものでしかなかった。このことはその信仰がそれ程熱烈なものでなく、朝鮮人自身による伝道がほとんどなかったことを示している。

以上の事例よりみて、ここでは単に、朝鮮の保護国化以後にわかに活発な伝道を開始した天理教が、地方の両班層を中心にわずかに朝鮮人と接触をもつたに過ぎないと推測するにとどめておきたい。

三、伝道基盤の確立

(一) 布教規則の公布と改正 朝鮮総督府は一九一五年(大正四)八月、府令八三号をもって「布教規則」を公布した。

これは一九〇六年の「宗教ノ宣布ニ関スル規則」を補正して、朝鮮におけるすべての宗教運動を総督府の意志の枠内に把握しようとしたものであった。²⁰⁾そして、内地宗教に対しては「朝鮮人を内地人の吾々と同じ思想、同じ風儀に同化することを根本の目的として、奮励努力せらるるのが布教規則の精神に、最も順応したる所作である」とされたのであった。内地宗教に朝鮮人同化政策の一翼を担わしめることが、その目的のひとつであったわけである。こうした傾向は一九一九年(大正八)の独立運動以後、一層強められることとなった。すなわち、一九一九年四月、総督府は教会設立の「許可主義ヲ届出主義ニ改メ同時ニ諸般ノ複雑ナル手續ヲ省略シ以テ便宜ヲ図ルコト」とした²¹⁾のである。

これは事務手続の簡易化を計り、内地宗教の朝鮮での布教を奨励したものに他ならなかった。総督府は独立運動以後武断政策から文治政策に転換し、教育による朝鮮人同化に力を注いだが、その漏れ落ちた部分を内地宗教をもって補おうとしたのである。

天理教は日清・日露の戦争における献身的協力と、国家理念に沿った教義の整備と教団の組織化により、すでに一九〇八年一月、国民教化の方向で一派独立を許されていた。そして、大正年間に入ると讃岐紡績・富士瓦斯紡績・三重紡績等々への女工の募集や布教がさかに行なわれ、雇主に喜ばれる従順でよく働く女工の育成に努めたのであった。^③このように内地にあって国民教化に実績をあげている天理教にも、総督府は朝鮮人同化政策の役割を期待したのである。一九一六年(大正五)二月、総督府属渡辺彰は次のように言って天理教の朝鮮伝道を奨励した。

総人口の約一割を天理教の信徒とする者を以て努力せられたならば、管長に対しても又、教祖の墓前に参詣しても、赤面することはあるまいと思ひます。^④

(二)活発化する朝鮮人への伝道 一九一三年(大正二)と一九一五年は、いずれも朝鮮であたらしく教会が設置されることのなかった年であった。また、この間の『道の友』には朝鮮関係の報道がばったりと跡絶えており、明治末の伝道気運の高まりが一時停滞したことを示している。しかし、一九一五年の布教規則の公布を契機として、翌年より再び活発化し始め、さらに一九一九年の独立運動と布教規則の改正はその傾向に拍車をかけた。そして、この期の特徴は内地人への伝道を主としてきたことを反省し、「本教も直接朝鮮サラミーに伝道するにあらずんば、朝鮮伝道の意義は半ば没却せられて居るものと云はなくてはならぬ」^⑤と、朝鮮人への伝道に力点が置かれたことであった。

一九一七年六月、京城の布教管理所内において第一回連合婦人会が開会された。従来から婦人布教師は、朝鮮人の内房深く入りて布教できるという理由で重視されてきたのであるが、これを朝鮮全道にわたって組織化し、朝鮮人伝道の強化を計ることがその目的であった。^⑥同じく朝鮮布教管理所内において、一九一九年九月には六カ月卒業の朝鮮布教者養成所が開設されている。ここでは朝鮮人には日本語、日本人には朝鮮語を教えるとともに、教義要領や祭式、

朝鮮の祭文宣教などが講義された。また、一九二〇年四月には植民地布教後援会なるものが組織され、木浦の近くに三二、六六七坪の水田を購入して農園の経営が始められ、その利益は朝鮮における伝道の経済的援助にあてられた。このような伝道の奨励と対策を背景に、朝鮮人への伝道は次第に活発化されていったのである。では実際その伝道はどのように進められたのか。当時京城近辺でさかんに朝鮮人伝道を進めていた生田信一郎は、その一例を次のように語っている。

京城府楼下洞に尹爵敏といふ老人がありました。当時六十三歳、前年の末から脳膜炎に罹りましてからは、何とでもよくならず、もう全然助からぬものとして家族や親族が寄り集って、今日か明日かと老人の死を待つて居たのでありました。(中略)私は、私の云ふことをよくよく胸におさめて行って下されば屹度一週間内には御守護が頂けるから私に委して下さい。私に委すことは神様に任すことです。神様の御話をよく聞いて下さい。未だ生きて居る人に葬式の用もないものですと云って神様にお願しお話を取次がして頂いたのであります。(中略)以来快復して、その子供等は熱心なる信者となられ日々勤めをかかさずしておられます。②

同じころ馬山では金貴男という女性が強度の神経痛に困り、救いを求めて入信している。入信の際、彼女は「悪因縁を切れ」という布教師出光の言葉に強く心をとらえられたという。また、一旦帰国して後再び朝鮮に渡った沢村芳郎も、木浦の町を病人を探して歩きながら布教していたと伝えられている。③

このように、この期における朝鮮人への伝道は、病人を主に対象として「神様の御言葉」、おそらく八つの埃や貸物借物の理、因縁の話などの簡単な教理を説き、朝鮮人庶民の心に素朴な感動を与えながら信者を獲得していったと考えられるのである。

(三)朝鮮人布教師の出現 朝鮮人布教師が現われ始めるのは一九一六年ころからである。今、その最も早い例として二名の布教師をあげることができる。ひとりには江景出身の女性布教師で、夫の病気を救われたのが入信の動機であったという。彼女は子どもを背負いながら布教し、一九二〇年(大正九)に京城の教義講習所に入っている。いまひとり

は馬山を中心に積極的な伝道を展開した金善長である。ここではこの金善長の入信と伝道を中心に考察し、朝鮮における伝道基盤がどのようにして確立されたかを見てみよう。⁵⁰⁾

金善長は一八八一年八月、慶尚南道昌原の近くの山間の村芝介里に生まれた。その生家は近在では相当大きな地主で、代々篤い仏教信徒の家柄であったと伝えられている。そして、一七歳で漆原の高利貸の娘と結婚した。このとき善長は熱心なキリスト教徒であった義父につられて、一時キリスト教会に通ったという。このことは、後に一神教的創造信仰の側面を持った天理教を受け入れる下地となったとも考えられる。結婚後数年たって、善長の家は日本の進出と李朝の滅亡という激動の中で没落に向っていった。このころから善長は放蕩に耽るようになり、ついには妻子を捨てて出奔するに至ったのである。

故郷出奔の数年後、善長は木浦において日本相手の海産物業を営むようになっていたという。しかし、入信当時は商売の方も下火に向い、その生活はかなり窮迫していたと思われる。そんなある日、善長は左手首の動脈を切るという事故に会い、やがて傷口は化膿し、ついに医者より左腕切断を言い渡される程になった。落胆の淵にいた善長は、当時木浦の町で布教していた沢村芳郎と出会いその苦悩から救われたのである。そのとき善長は片言しか解せない日本語のなかで、芳郎が心から悪因縁を切るように諭した言葉に深い感銘を受けたという。代々篤い仏教信徒の家に育ち、自ら骨肉を捨てて来た善長の心を、天理教の因縁の話が最も強くとらえたのである。

入信後まもなく、善長は芝介里の家族のもとに帰って行った。帰郷後は家に神壇を設ける一方、馬山の天理教会に通うようになっていた。そのころから善長の布教は次第に積極化していった。不具者、病人があると聞けば訪ねて行き、自らを救ってくれた神の話を説いて聞かせたようである。しかし、布教の積極化とともに迫害者も増加していった。人びとは善長がどこかで日本の巫術をならってきたと罵った。また、病床に伏す未亡人を訪ねて「お助け」をする善長を、淫なことをするのが目的だとも言って攻撃したのであった。村人は道行く善長に唾をかけ石を投げ罵倒した。このような迫害の中でも最も善長を苦しめたのは母必何の反対であった。必何は、仏教の由緒深い家柄であるの

に日本の巫女のまねをすることは許せないと言ひ、ただちに家に設けた神壇を取り払うように主張したという。このやうな村人、母親の反対は、朝鮮社会の通俗倫理や旧宗教などきわめて多面的な要素を含んでいたことを示している。しかも、それが日本宗教であることよつて激烈化しているのが特徴的である。なかでも一九一九年の独立運動前後は迫害の激しさが頂点に達し、「みかぐら歌」を歌ひ天理王命を信ずるよつて訴える善長は、売国奴とまで罵られたという。それでも善長は信仰と国の歴史とは関係ないと言ひ張り、自分の人生を神に捧げよつという決心を崩さなかつた。

この年、善長は京城に設けられた教義講習所の二期講習に参加し、修了後ただちに渡日して教会本部で教えを受けて帰国している。帰国後善長は、しばらく馬山宣教所に住み込んで布教していたが、やがて言良宅、金貴男、金相局の妻の三人の朝鮮人信者を従え、馬山南城洞を拠点として独自に布教することとなつた。はじめ南城洞の布教所には呪術を求めて集まる人びとが多かつたが、善長は病のもととは心からだと言ひ、知らず知らずのうちに積んだ埃や前世に積んだ埃(悪因縁)を払わねば病氣は治らないと説くのであつた。こつして次第に永続的信者ができるようになり、一九二二年一月、美鮮宣教所の認可を受けることとなつたのである。こつして翌翌一九二三年には高福用、金龍周、金周喆、朴元吉、金明介など、後に美鮮教会で重きをなす信者が続々と入信したのであつた。

金明介は一八歳のとき顔に腫物ができて苦しんでいた。まず善長の布教によつて父母が入信し、続いて明介も入信した。入信後知らぬ間に腫物は治つていたという。明介は熱烈な布教者となつた。金周喆は胃癌を救われての入信。後に昌原郡東面を主に布教した。また、巨濟島の壺商人郭泰吉は胃病と肺病から入信。三年間の信仰の後群山に布教し、さらに昌原龜徳河里に布教に出たという。

今日善長にはじまる美鮮教会は景鮮教会をはじめとする二〇の部属教会を生み、大韓天理教の一勢力を担つてゐる。その伝道の基盤は蓋しこの期間に確立されたものであつた。

こつよつに一九二〇年前後の時代は、金善長に代表されるよつな朝鮮人布教者の現われた時期であつた。『朝鮮天

『理教教報』創刊号は一九二一年に両江道、慈江道、平安北道、江原道を除く各道に朝鮮人信者の集団が形成され、朝鮮人伝道の基盤が確立されつつあることを示している。そして一九二九年（昭和四）二月には「朝鮮人布教は困難」だと言ったのは既にもうとつくの昔話になってしまった。（中略）一意邁進鮮人救済にと心を継いで居る所には立派な芽も出た、枝も出た、既に花も咲いた」と報ずるに至ったのである。

おわりに

天理教の朝鮮伝道は一八九〇年代後半における教勢の全国的伸展と、それに伴う社会的攻撃の激化という当時の情勢に影響されて開始された。それは教団とは関係なしに特定の信者、布教師によって始められたものであったが、一九〇五年以後の韓国の保護国化とそれに続く日韓併合は、教団が積極的に朝鮮伝道に乗り出す契機となった。教団は国策に迎合するかたちで朝鮮伝道を鼓吹奨励し、ここに教内における伝道熱の高揚を見るに至った。このような伝道気運の高まりの中で布教者が次々と朝鮮に渡ることとなったが、もちろん教団が直接彼らを派遣したのではなく、個々の布教者が自身の純粹信仰に根差した部分で伝道を決意し朝鮮に渡ったのであった。そしてこの期にあっては伝道の活発化にもかかわらず朝鮮人信者は微々たるもので、わずかに地方の両班層と接触をもったにすぎなかったようである。しかし一九一五年前後になると、天理教はその民衆的性格を十分に發揮し、社会の中、下層の人びとに根深く浸透するに至った。そこでは「おさづけ」と呼ばれる病氣治しを中心とした呪術的側面が強く作用するとともに、天理教の「因縁」の教理が受け入れられたことが特徴であった。かくて出現した朝鮮人布教者は、教団の標榜する同化政策と、一般朝鮮人が日本の宗教を信ずることは売国的行為と批判する間にあつて、あくまで自己の純粹信仰を保持し続けたのである。彼らは、自らの強い信仰の中で朝鮮伝道を決意した布教者によって伝道された人びとであった。そして、そのことこそこの期における朝鮮人布教者の出現を、今日の大韓天理教の基盤となさしめたものであったといえるのである。

注

- ① 『金光教徒』一九一六年三月一日。
- ② 上村福太郎『潮の如く』上巻、三九六ページ。
- ③ 一九七三年七月、南浜静氏談。
- ④ 『道の友』一九〇九年八月号。
- ⑤ 『韓国施政年報』一九〇六年一九〇七年、三九六ページ。
- ⑥ 『宗教ノ宣布ニ関スル規則』(『官報』一九〇六年一月)。
- ⑦ 『韓国施政年報』一九〇六年一九〇七年、三九六ページ。
- ⑧ 松村吉太郎『道の八十年』、二五一ページ。
- ⑨ 『道の友』一九〇九年七月号。
- ⑩ 『道の友』一九一一年二月号。
- ⑪ 『道の友』一九〇六年一月号。
- ⑫ 「おふでさき」八一四(『天理教原典集』、二〇五ページ)。
- ⑬ 『道の友』一九〇九年五月号。
- ⑭ 『道の友』一九〇九年六月号。
- ⑮ 『道の友』一九一〇年一月号。
- ⑯ 『道の友』一九一一年七月号。
- ⑰ 『道の友』一九一〇年一〇月号。
- ⑱ 『道の友』一九一〇年一〇月号。
- ⑲ 沢村松栄氏の録音テープ、および一九七三年八月、井上芳太郎・沢村安次・沢村澄治の三氏の話による。
- ⑳ 一九七三年一〇月、山本くすおよび岸ノ里分教会山本会長談。
- ㉑ 『道の友』一九〇九年六月号。

- ㉒ 『道の友』一九一三年五月号。
- ㉓ 『官報』一九一五年八月。
- ㉔ 『道の友』一九一六年一二月号。
- ㉕ 『朝鮮総督府施政年報』一九一八年一九二〇年、一五三〜四ページ。
- ㉖ 『道の友』一九一四年二月、三月、七月号。女工伝道の活発化は後に「モラロジー」を提唱した広池千九郎の入信と深い関係を持っているが、ここではそれを論ずることが目的でないので割愛する。
- ㉗ 『道の友』一九一六年一二月号。
- ㉘ 『道の友』一九一七年五月号。
- ㉙ 『道の友』一九一七年七月号。
- ㉚ 『道の友』一九一九年九月号。
- ㉛ 『道の友』一九二〇年一〇月号。
- ㉜ 『道の友』一九二二年八月号。
- ㉝ 羅石基『金善長の一生』、一二四〜八ページ。(『金善長の一生』は全頁数二二一ページで、すべて謄文で書かれている。一九六五年、大韓民国において発行。翻訳については福原章氏を煩わせた)。
- ㉞ 沢村松栄氏録音テープによる。
- ㉟ 『道の友』一九一九年九月号。
- ㊱ 金善長については、前記の羅石基『金善長の一生』によった。